

---

# 魂の絆

蒼霧 雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魂の絆

### 【Nコード】

N1940Y

### 【作者名】

蒼霧 雪

### 【あらすじ】

藍色の男、野良<sup>ノラ</sup>。その男は謎だらけ。意外と人懐っこい彼は、たくさんの人と関わりながら、人の謎を暴き始める。そして彼自身のことも明らかに!!

とっても奇想天外な野良の人生を御覧あれ!!

## 藍色の男

「鬼がやってきたよ。」  
少年が囁いた。

「目を合わせてはだめ。石にされてしまっわ。」  
母親が叱りつけた。周りの人間がうなずく。

白い髪、紅い瞳、藍色の着流し。腰には太刀はなく脇差だけ。異様な風体の男は、周囲のことなど目にくれずただ、颯爽と歩いていく。

彼の名前は、野良<sup>ノラ</sup>。本名かどうかは、誰も知らない。それどころか、野良がどこに生まれ、どこから来たのか、親しいものでも何も知らなかった。

彼が目指すのは、この町のすぐ隣のコダマ山を超えた所にあるとても小さな村。自分に関係のないところは、ただの通過点にすぎない。視界に入れる必要もない。そういう考え方をする男であった。そんな野良の瞳は紅く冷たく光っていた。左利きなのか、右にさした脇差の柄の部分に肘を置き、鯉口を軽く握っていた。「鯉口を軽く握る」ということは、いつでの刀を抜ける、いつでも戦えるという印だった。

ただの町人である人々にとっては、これ以上恐ろしいことはない。大人数でひとところに集まり、ちらちらと野良のほうを見ていた。そして、あることないこと小声で話し始めるのであった。

町人が話しているうちに野良は町を出て、コダマ山のすぐふもとにある古ぼけた。「風鈴<sup>ふうりん</sup>」という看板を掲げた食堂の前に立った。戸はぴつたりと閉じ、中からは物音ひとつしない。

野良は舌打ちをすると、戸を「トン、トントン、トン」とたたき

最後に首から提げていた笛を短く吹き鳴らした。すると、戸の横にある窓の隙間から紙が出てきた。野良は再び舌打ちをすると、その紙になにやら書くと窓に押し込んだ。すると、戸が開いた。小さな女の子がひよっこり顔を出した。

「そろそろ来ると思ったよ。いらっしやい、お侍さん。」

楽しそうに言う少女に野良はつぶやくように言った。

「そんなんじゃないねえ。……遠い昔の話だよ。」

そういった、野良の顔は苦しそうにゆがんでいた。

## 藍色の男（後書き）

はじめまして。蒼霧 雪です。

初めての投稿で、見苦しいところもあると思いますが、頑張りますのでどうぞよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1940y/>

---

魂の絆

2011年11月16日18時45分発行